

## シンキング・エラー

2026・3・11 重枝 一郎

平野先生から借りた本で「いじめの科学」を読んだ。読んでみて、あらためて、開発的生徒指導（すべての生徒が対象＋先手的＝授業化できる）や、傍観者を物言わぬ多数派にしない、解決するための力を持っている者の集まりにするといった集団づくりが大切だと認識した。（校長研修だより219「すべていじめです」）

いじめが蔓延している集団では、心理的安全性が低い。そうすると、授業で「自分の考えをもつ」という大切なことをしなくなる。なぜなら、自分の考えをもったり、表現したりするには、安全・安心を感じる心理的要因が大きいからである。

いじめ問題においては、被害者や傍観者のことを話すことが多い。今号は、加害者の特徴について、本を参考に述べる。

いじめの加害者の特徴として「（共感性のなさに基づく）シンキング・エラー」がある。シンキング・エラーとは、誰かを傷つけていても「遊びだ」「自分にはそうしてよい権利がある」などと捉える間違っただけの考えのことである。また、そういう加害者の周りには、同じような行動をするモデルが存在する可能性があり、それは大人であるかもしれない。

この加害者に対して、シンキング・エラーを修正する支援が重要になる。シンキング・エラーを放置すると、いじめ行動を問題のないものとして学習してしまう。

加害者の聞き取りをする際、自分のした行為をいじめとわかっていなかったり、やむを得ないと考えたりしていることがある。これらのシンキング・エラーは「言い訳」となってあらわれる。また、加害者なのに被害者感情を抱いたり、反抗したりと様々な反応を起こす。

下表はシンキング・エラーへの対応例である。教師はブレない語りができなくてはならない。加害者に対し、二度と同じようなことをしないためには、考え方を考える支援が重要になる。シンキング・エラーがある場合は、正しい考え方を語らなくてはならない。

シンキング・エラー	その対応
<b>被害者意識</b>	
（そのいじめは）他の人が始めたから仕方がなかった。（いじめを）やらざるをえなかった。	他の人の行動ではなく、自分の行動として考えさせる。
<b>他人を傷つけることの認識のなさ</b>	
そんなことで傷つくと思わなかった。相手の気持ちを考えていなかった。	自分がその人の立場だったらどう感じるのか考えさせる。
<b>自分勝手</b>	
やりたくないこと、つまらないと思うことはやらなくてよい。やりたいことはいつでもやりたいうようにやってよい。	やりたくない、つまらないことでもやらなければならない場合があること、逆にやりたいことを我慢しなければならない場合があることを説明する。
<b>怒り</b>	
怒りによって、他人をコントロールできる。怒りを脅迫、皮肉、暴力などの形で表現してもよい。	怒りの原因に気づかせる。怒らなくてすむ方法を考えた方が、本人にとっても周りにとってもよいことに気づかせる。
<b>勝ち負け判断</b>	
いつも1番にならなければならない。1番でなければ負け。	物事には様々な段階があり、負けることから学ぶことが多いと知らせる。

加害者の将来を考える場合、共感性に基づいた正しい考えを身に付けさせること。1回ではなく、継続的に行うこと。これを学年だよりなどに活用してもよい。